

荒野のような人生でも

〔聖書〕 詩編 23 編 1～6 節

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。

わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢れさせてくださる。

命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう。

〔序〕 厳しい風土に生きる羊

今日学ぶ詩編 23 編は、150 ある詩の中でも「詩編の真珠」と呼ばれて世界中の人々から一番親しまれている詩でしょう。短い詩ですから暗誦し易いので、人生の折々にこの詩によって慰められ、多くの方が力づけられてきたのです。

私たちの国日本は緑豊かな里山に囲まれ、田んぼに稲が豊かに稔る風景が何処にも見られる水の豊かな国です。この様な国に暮す私たちがこの詩を読むと、青草豊かな牧場で羊の群れが思い思いに草を食べ、小川のせせらぎから水を飲む、のどかな牧歌的風景を想像してしまいます。

しかしこの詩が生まれたパレスチナの風土は、緑豊かな土地はガリラヤ地方のごく限られた地域だけで、草木の乏しい荒れた丘が連なる風土なのです。私はこの地方に2週間滞在し、レンタカーでドライブしました。6月でしたが強烈な太陽をさえぎるものは何一つなく、車の中のペットボトルが大きく膨張してお湯になっていました。

ですから非常に迷子になり易く、敵の攻撃から身を守る力を持たない羊の群れを、草原や水辺へと導く羊飼ひがいなければ、羊は生きていけないことがよくわかりました。「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」。本当にそうなんです。良い羊飼ひに守られ、導かれている限り、羊は何一つ欠けることなく与えられて、生きていけるのです。

〔1〕 良い羊飼ひに聞き従う

しかし私たち人間は羊とは違います。青草や水さえあればそれで十分ではありません。悪に染ま

らず、誘惑に陥らず、正しい道を進まなければなりません。そこで私たち人間にとって、欠かすことの出来ない大切な言葉が、続いて歌われているのです。

「主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる」。何と多くの人が、金や力を得ようとする道を探めていることでしょうか。その道は罪の誘惑に満ちています。神さまに養われて生きる者にふさわしい道をこそ、求め選ぶべきです。私たちを正しい道に導く羊飼いに、従っていかなければなりません。

「主は、正しい道に導かれる」という言葉の次に、「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない」という言葉が続いています。正しい道を進むことが、のどかな野原のハイキングとは違う。厳しい試練の待ち受けている死の陰の谷を行くことでもあると、言われているのです。災いのない人生などありません。しかし良い羊飼いである神さまが私と共にいて下さるから、災いを恐れないのです。

「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける」。羊飼いは、鞭を振るって羊に襲いかかる獣を追い払います。羊が群れから迷い出て独り歩きを始めると、杖で軽く叩いて引き戻してくれます。その鞭と杖を持っている神さまと一緒に歩き、導いて下さる限り、たとえ死の陰の谷を進む人生であっても、災いを恐れないと詠っているのです。

「わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる」。日本には「家を出ずれば七人の敵あり」という格言がありました。この世には常に多くの敵がいるから、よくよく用心して事をすべきだという教訓です。悪意を抱き、打ち倒そうと攻撃してくる敵、味方を装い隙をみて私を陥れて失敗させる敵、ちょっとした油断や失敗をすかさず突いてくる敵、非難中傷をばらまいて仲間を集め、私を孤立させる敵等、この世には敵が大勢いるのです。正しい道ほど、この世の悪が、目の仇にして攻撃して来ます。

そればかりではありません。特定の敵ではなくても災害とか病気・事故など、大きなダメージを与えて、私たちの生活設計を狂わせてしまう出来事が、突然襲ってきます。これも「わたしを苦しめる者」ではないでしょうか。これらもろもろの私を苦しめる者が、私の前に立ちほだかり、激しく攻撃して来ますと、食事も喉に通らなくなってしまいます。

すると神さまは、「落ち着きなさい。食事をゆっくり食べて、力を蓄えなさい。よく考えて全力で立ち向うのです」とおっしゃって、食卓を用意して下さいます。あなたは大切な人だよと、祝福の香油を頭に注ぎ、勝利の杯を満たして「大丈夫。私があなたと共にいる。私を与える祝福を貴方から奪う者はいない。これは勝利の前祝だよ」と励まして下さるのです。

「命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う」。皆さん、私たちは恵みや慈しみを、必死に追い求めて生きていませんか？ でもこの詩では、恵みと慈しみの方が、いつも私を追いかけてきてくれると詠っています。では命のある限り、私は何を追い求め続けるべきなのでしょう？

私を青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる羊飼いに従い続けることです。主の御名にふさわしい正しい道に導いてくださるお方に従うことです。人生が死の陰の谷底のような道になっても、鞭と杖を手にして私と共に進んでくださる羊飼いの守りを信じて、進むことです。私を苦しめる者に悩まされるさ中で、主が与えて下さる霊の糧、命の言葉を食べて動じないことです。

[2] 試練の中で耐えて時を待つ信仰

ここで、写真家善養寺康之さんの「聖地ひとり歩き」の中に記されている「荒野で出会った羊の群れ」についての一文を紹介します。

「幾重にも丘陵が連なる起伏の道を車で走り続けていた私は、前方に羊の大きな群れを発見した。真昼時を過ぎたといっても、とてつもなく暑い。身を隠すものは木立一つない荒野である。真上から照りつける太陽をまともに受けても、大地に生きる生き物は、なすすべを知らない。」

「羊たちは互いに身を寄せ合い、じっと立ちつくして、この過酷な太陽が西に傾くのを静かに待っていた。そこには不思議な沈黙があった。時折隣りの羊の体の下に首を突っ込んで、暑さをしのごうとする動作を除いて、この沈黙を破るものはなかった。」「私はこの静止がどれくらい続くものかと、車を降りて眺めることにした。それは気の遠くなるような暑さと時間との戦いであった。」

「耐え難い時間がどの位続いたであろうか。にわかに羊の群れに落ち着きがなくなって来た。すると何処にいたのであろうか、羊飼いが現れて、首に鈴を付けた羊を先頭に立たせると、羊たちはおもむろに歩き始めて、見事な列を作るのであった。」

「このパレスチナの大地に生きる総ての生き物は、圧倒的とも言える自然の下にあって、すべての事に為すべき時のあることを知っている。その時が来ない限り、いかに叫び求めても、自然は沈黙を守って語ってくれない。私は羊を見守っているうちに、神の試練の中で耐えて待つことの意味を知らされたような気がした。」

身を隠す木立一つない荒れ野で、過酷な太陽の下、体を寄せ合ってじっと立ち尽くして、日が傾く時を待っている羊の群れ。時が来ない限り、いかに叫び求めても、手を差し伸べてもらえない。一切が静止したまま。しかしその沈黙と静止が何時までも続くわけではありません。日暮れは必ず来るのです。その時の到来を信じて、耐えて待っている羊の群れ。善養寺さんはこの羊の群れから、神の試練の中で、耐えて時の到来を待つ姿勢を学んだと語っています。日本に居ては想像もつかない厳しい自然が、人生を生き抜いていく大切な心を育てているのですね。

水と緑の豊かな国、経済的に豊かな国で暮していると、苦しみに弱くなり、安直な解決に走り勝ちになります。直ぐに弱音を吐き、絶望してしまいます。厳しい状況の中で、じっと耐えて、時を待つ——これは、正しい道を歩もうとする者には、どうしても身に付けるべき心構えではないでしょう

か。

人生の厳しい状況が「死の陰の谷」と言われています。死の谷とは言わず、死の陰の谷——死の陰に怯える谷なのです。ですから英語の或る訳では、“The deepest darkness”と訳されています。深い闇とは希望の光が全く見えない暗黒です。だから絶望するのです。

絶望をもたらす深い暗闇、まさに死の陰に怯えて絶望するのです。しかしあの羊飼いが私を導いて下さる。私と共に居て、守っていて下さるという信仰がある限り、「私は災いを恐れない」「あなたの鞭、あなたの杖、それが私を力づける」と言い切ることが出来るのです。

私を苦しめる者を前にしても、普段通りに食事が出るとは、よほど胆力の据わった大人物なのでしょう。違います。作者は自分を羊だと言っています。自分で身を守ることも出来ない上に、迷子になりやすい臆病な羊だと自覚しています。しかし良い羊飼いに守り導かれているから、こんなに落ち着いて居られるのです。

自分が、良い羊飼いである神さまに、大切に守り導かれている羊である、という揺るがない確信が必要です。詩編 23 編が多くの人々に愛唱されてきたのも、その確信を与えてくれる信仰の歌だからにほかなりません。

[結] 主の家に帰る

羊飼いに導かれ、養われている羊は、群れをなしている羊です。1頭だけの羊ではありません。2～3頭でもありません。何十頭、何百頭と群れをなして養われている羊です。イエス・キリストは「わたしは良い羊飼いである」(ヨハネ 10:11)、「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う」(ヨハネ 10:27)とおっしゃいました。

この詩は「主の家にわたしは帰り、生涯そこにとどまるであろう」という言葉で締めくくられています。良い羊飼イエス・キリストに従う羊たちが帰っていく主の家——それは、毎日曜日に集まって、キリストを礼拝する教会を指しています。キリストの命の言葉を聞き、魂を生き返らせて、讃美を歌い祈りを捧げる礼拝から、主は私の羊飼い、私はその羊であるという信仰が育まれていくのです。その主の家、教会に私は帰り、生涯そこにとどまる、という信仰の歌なのです。

またイエス・キリストは「わたしは彼らに永遠の命を与える」(ヨハネ 10:28)とおっしゃいました。そこでこの詩の終わりの言葉「主の家にわたしは帰り、生涯そこにとどまるであろう」を、口語訳では「わたしはとこしえに、主の宮に住むでしょう」、新欽定訳では“I will dwell in the house of the Lord forever”と訳されています。永遠に住む主の家とは天国・神の国ですね。

私の牧師は、跡取り息子をジフテリアで小学校6年生の冬に亡くしました。顔を洗い歯をみがき、パジャマを着替えて程なく、お母さんに「僕、帰るよ」と言って息を引き取ったそうです。はじめは病

院から家に帰ることだと思いましたが、お母さんは直ぐに、天国へ帰っていくことだと、気付いたそうです。ですから私の牧師は、「天国は行く所ではなく、帰って行く家なのです」とよくおっしゃっていました。

私たちの命は、この地上の生涯だけで終りではありません。死は The End ではないのです。皆さんは死の彼方の生を見つめておられますか。たとえ死の陰の谷、あるいは荒野のような人生であろうとも、帰るべき永遠の家、天国を見つめつつ、この詩編を歌いながら、生きていきたいものです。